

# 第71回 幅広いジャンルで輝いた 西田佐知子の歌唱力

昭和52年、私が出版社の学研に途中入社した直後、映像子会社の作品を見せられたことがあり、そこに映し出されていたのは、紫の風呂敷がパラリと解かれると日本酒の一升瓶が現われる、というTVコマーション用のものでした。映像をバックに流れてきたのが「菊正宗」と歌う西田佐知子の声でした。

歌謡界における西田の足跡を追ってみると、興味深い変遷に気づきます。昭和31年、マーキュリーという弱小レコード会社から発売された17歳時のデビュー曲（シングル盤B面）は、A面の藤島桓夫「勘太郎天龍唄」のアンサーソングに当たる股旅ものでした。

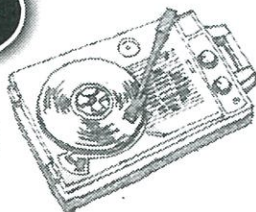
ブレイクするのはレコード会社をポリドールに移した後の昭和35年、過去の和風イメージを払拭して『アカシアの雨がやむとき』をリリース。「死」をイメージした異色の歌詞は、60年安保闘争がピークを迎える2か月前という発売時期と重なり、デモで亡くなった女性への弔意や若者た

ちの挫折感とシンパシーを共有、抑揚を抑えた西田の歌唱は退廃ムードのレットルを貼られることになりま

## 名曲カルテ

# 昭和歌謡と いつまでも

堀井六郎  
絵 松本 浦



した。

以後、映画音楽や米国のポップスをカバーすることで退廃イメージからの脱却を図りますが、ベネズエラ産の曲『コーヒー・ルンバ』で実を結んだのは、翌年8月のことでした。その後は、子供心にも記憶に残る歌をコンスタントに発表、青春歌謡の『エリカの花散るとき』、『星の流れに』を思わせる和製ブルースの『東京ブルース』、ムード歌謡の『赤坂の夜は更けて』、和製ポップスの『信じていたい』、女性一人GS調の『涙のかわくまで』、これらの曲で毎年のように紅白歌合戦に出場します。

私の8歳から17歳までの記憶の中に印象深く刷り込まれただけでなく、今でも昭和の時代を象徴する歌として広く歌われているわけですから、

その寿命の長さに敬服します。さらに特筆すべきは、歌のジャンルの広さにあります。右記以外にも『女の意地』や『裏町酒場』などの演歌もこなし、デビューの股旅ものから30歳時にリリースした歌謡ポップスの傑作『くれないホテル』まで、『アカシアの雨がやむとき』からの10年間、マンネリズムに陥らずにいたことが、ファンを離れさせずにいた理由の一つでもあるでしょう。

美貌だけでなく、どの曲も歌いこなせる歌唱力と、彼女だとすぐわかる声の魅力が歌手・西田には備わっていたということであり、その集大成が結婚後の30代半ばに歌われた、冒頭のCMソングだったように思います。

「菊正宗」の歌は、昭和54年に『初めての街で』の題名で市販された、40年以上の時を経た現在でも、歌の寿命は尽きていません。西田の歌の生命力を見抜いた広告代理店の慧眼か、西田の魅力を引き出した作品のパワーか。どちらにしても、作詞した永六輔と作曲した中村八大は、今頃、泉下で上を向きながらいつもの美酒に酔っているかもしれません。